

「知性と無知」

エペソ人への手紙4：18

April.21.2024

エペソ人への手紙4：18 (パウロ)

Preface

「知性」という言葉は、大概の人にとって魅力的な言葉と言いましょか、憧れを抱くような言葉ではないかなあとと思います。

一方で、劣等感を抱かせてしまう言葉でもあるかもしれません。

でも聖書の語る、また、今日の聖書箇所です使徒パウロが語る知性は、人に劣等感を抱かせるような知性ではなく、むしろ、喜んで進んで遜りたいと思わせるようなものです。

劣等感が強めの私にとっても、「知性」という言葉は魅力的な言葉として認識されてきましたが、一般的に「知性」という言葉、または「知的」という言葉を用いる時には、そこに神という存在を認めることなく、話が進んで行くように思います。

知性や知的という言葉を用いる時、「神」という言葉を出すと、もうその時点で知性でもなく、知的でもない。宗教的な何か、または得体の知れないあやふやで曖昧な茫漠としたものにすぎる、知性や知的とは真逆のここのように捉えられてしまうような世界観の中、この世の中回っているような気が致します。

伝道が出来ない、イエス様のことを証しすることがはばかれる、時が良くても悪くても御言葉を宣べ伝えることが出来ないのは、「神」という言葉を用いた時点で、知性とはかけ離れた世界に生きている人だと思われてしまい、そこに微妙な空気が流れ始めてしまうことが少なくないからかもしれません。

ところが、聖書が、また今日の聖書箇所ですパウロ先生が言っている知性は、そういう世の中の方こそが、そういう世界観こそが知性のないことであり、知性において暗くなっていることであり、無知で、頑固な姿だと言います。

ひと言で言いますと、神の存在を認めないことこそが、無知の極みだということなんです。

Part One

私は小さい頃から、知的な人になりたいという願望があったように思います。立派な人の話をたくさん聞き、立派な学校に進み、立派な先生から教を頂き、立派な本を読み、そうして知的になれば、何かこう根本的な根幹的な何かが見えるようになり、分かるようになり、それについて語れるようになると思っていました。

ところが、自分なりに、ほんの狭い範囲だと思いますが、立派だと言われるヒトやモノや機関に近づき属し、そこに何か答えのようなものがあるはずだと思ひ、浅はかながらも自分なりに観察し探ってみたはものの、そこには答えがない。

何だか、そこに関わっている人たちが、答えがない中で、あたかも答えがあるかのように思ひ、思わせられながら、また思わせながら、「何かに一生懸命に取り組んでいることでまあ良しとしよう、満足、これを突き詰めて行けば、何かしら大切な根本的なもの・ことを発見することが出来るだろうし、到達するだろう」という淡い期待と言いましょか、淡い期待と言うと、そこに時間やお金や人生をかけるまでの動機にはなり得ないので、ひとまず熱い情熱を持って一生懸命に取り組めるように、「不透明ではあっても、自信と確信をもって突き進んでいこう。突き進んでいった先には必ずや何か答えのようなものがあるはずだから」みたいな様相が多いのではないかと、何となく漠然と感ずるようになりました。

そういう営みの中で、色々そこねくり回して出て来た凡人にはそう簡単には理解出来ない理論のようなものだったり、高尚な体験談のようなものだったり、小難しい語彙豊かな言葉を並べ立てながら話が出来ようになることを、所謂、知性や知的と表現することに、何か違和感と言いましょか、「本当にそれでいいのかなあ、本当にそこに答えのようなものが、知的なものが、根本的なものがあるのだろうか」というような思ひがあつたように思ひます。

そして、イエス様に出会いました。

イエス様が出会ってくださいました。

聖霊なる神様が、心の奥底の琴線に触れて下さり、神が分かつてしまいました。

それまで認識出来なかつた神が認識出来るようになり、神というお方は、動くことも、口を利くことも、息をすることも、触れることも、歩くことも出来ない感情や意思のない偶像ではなく、何ものよりも豊かな感情と意思をお持ちの方であることが分かつてしまいました。

と同時に、恥ずかしくてたまらなくなりました。

自分のみが知つていた人前には隠しているあんなことも、こんなことも神様はずうっと見ておられたし、知つておられたし、これからもその神様の視線を意識しながら生きて行くことになるんだということが、恥ずかしくてたまらなかつたことを覚えております。

正に、その時、閉ざされていた目が開かれたということを実感いたしました。

それまで、見えていなかったということが分かりました。

分かつてもいなかったということが分かりました。

そして初めて、「分かつて」という知性が芽生え、与えられたように感じま

した。

暗くなっていた知性に、初めて光が差したように感じました。

それまで、知性とか知的とかと思っていたことは、自らが勝手な基準で知性だとか知的だとか主張していただけの偽りの知性であり、偽りの知的であったんだということ、そして人は、イエス・キリストなる神の存在を認めない限り、無知でしかないんだということが分かってしまいました。

創世記3章を見ますと、神との親密な関係を自らの意思で壊し、罪人となった最初の人アダムとエバが、豊かないのちの場であるエデンの園を追い出されてしまい、東の方へと追放されてしまったことが記録されていますが、その神との関係が断絶した東の方の世界に生きる生まれながらの肉に属する自然のままの私たち人間には決して分からない、神を知るという知性に、神の豊かな恵みと哀れみとによって立ち返らせて頂いたとしか表現できないものだと思います。

また同じく創世記1章、2章には、人は元々、神のかたちに造られた存在であって、神の息が吹き込まれて初めて「人は生きるものとなった」と書いてありますが、創世記6章に行きますと、生まれながらの罪人ゆえの罪ゆえに、地上の悪を増大させてしまい、その心に凶ることがみな、いつも悪に傾くようになってしまい、神の霊が、神の息が人のうちにとどまることが出来なくなってしまったという人にとって根本的な悲劇が書かれています。

正に、神を知る、神とともに生きるというまことの知性を完全に失ってしまったことが記録されています。

こうなってしまうとは、どんな技術も、どんな思想も、どんな理論も、どんな言論も、どんな功績も、どんな人の力をもってしても、再び人を本当の知性へと返らせることが出来なくなってしまいます。しまいました。

でも人は、そんなこと認めたくありません。

むしろ、神無しで、いやそれ以上に、神の存在を認めることこそが無知だと、曖昧な何か得体の知れないものにすぎる弱い人たちの行いだというイメージを植え付け、蔓延させ、人が、人の力によって、人のために、人ゆえに追求していくことが知性だと主張出来るように、自分たち人間が決めた基準や比較や競争によって、知的だとか、知性だとかというものを定め、そこに達したら知的であり、知性であると宣うようになったのが、この社会構造下での聖書の教える知性とは違う偽りの知性だと言えるでしょう。

Part Two

小中高大学生の頃、学校や塾の試験に臨む時、とりあえずあてずっぽうで、自分が覚えられるところだけを丸暗記して試験に臨むと、数字が変わっただけでも解けないですし、出された問題自体が違うのに、自分が一生懸命に覚えてきたことを答案用紙に書けないことが悔しくて、とりあえず、丸暗記してきたものを書いてペけを貰うという経験がありますが、結局世の中、そんな風に知

性を語っているのではないだろうかと思うのです。

神を知らずして知性はないというのに、自分たちの論理と自分たちの価値体系から、あたかも知性を得ることが出来、答えを得ることが出来ると、全然違う見当違いな回答をしているにもかかわらず、「いやいや、一生懸命にやって来たんだから、こんなにも立派なものが出来たんだから、どれだけ苦労してきたことか」と、それをもって答えだと言い張るかのように、人は偽りの知性を求め続けていることを、使徒パウロは、聖書ははっきりと真っ直ぐに語ります。

もちろん、その努力や犠牲は尊いものだという評価は得ることが出来るかもしれませんが、エペソ書4：18で言いますように、最も大事な「神のいのちからは遠く離れた」状態にあることには変わりなく、その偽りの知性で神のいのちに到達したというためしはございません。

ギリシャ語には、「いのち」を表す言葉が二つあります。

一つは「βίος ビオス」、そしてもう一つは「ζωή ゴエ」という言葉です。

「βίος ビオス」という言葉は、所謂英語の Bio、生物学的ないのちに関して用いる言葉です。

動物でも植物でも、その細胞や肉体などの有機的な組織や構造を観察し研究する時に用いる言葉が「βίος ビオス」です。

なので、この体が朽ちていき、やがて死んで無くなる肉体的ないのちの損失を言い表す時には、「βίος ビオス」のいのちが無くなったということになります。

一方、「ζωή ゴエ」のいのちは、それよりも高次元のいのちのことを指します。土のちりに帰るいのちではなく、神の前にあって天国なのか、地獄なのかのいのちを指し示す時に用いる言葉が、「ζωή ゴエ」です。

そして、エペソ書4：18で使徒パウロが、「神のいのちから遠く離れています」と言っているいのちという言葉は、「βίος ビオス」ではなく「ζωή ゴエ」です。

つまり、神のうちにいるといういのちがあるのかないのか、その人のうちに神の息があるのかないのか、その人のうちに神の霊である聖霊がいて下さっているのかいないのか、その人は聖霊がおられる神の宮なる人なのかそうではないのかという、神との関係がどうなのかにかかっているいのちです。

このいのちのことを、聖書では、「まことのいのち、永遠のいのちを」と言います。つまり、本当のいのちだということです。

そしてもし、この本当のいのちを持たないならば、「神のいのちから遠く離れた人」だということです。

イエス様が十字架に架かれる前、血の汗を滴らせながら祈ったゲッセマネ

の祈りの中で、この「ζωή ゼエ」のいのちについて、イエス様ご自身がこのように語っておられます。

ヨハネの福音書 17 : 3 (パウロ)

神のいのちとは永遠のいのちであり、この永遠のいのちを与えるために、主イエス様はこの地上に来られ、十字架に架かれ、死なれ、そして永遠のいのちそのものであられるお方ですから、死より復活されることをもって、イエス・キリストを知る信じる者たちに永遠のいのちを与えて下さいました。

そして、この永遠のいのちを知らずして、人は、知性を語ることは出来ません。

語ったところで、それは偽りの知性であり、穴の空いたバケツに水を貯めようと躍起になって注いでいるかのような愚かな姿、または、取り留めのないことの繰り返しによる疲弊に帰着したものになってしまうでしょう。

このことについて、使徒パウロ先生は第一コリントとローマ書でこのように言います。

コリント人への手紙第一 1 : 20 - 25 (パウロ)

ローマ人への手紙 1 : 21 - 23 (パウロ)

Part Three

神を神としてあがめないことは、知性ではなく、知的でもなく、むしろ、自分たちは知者であると独断で主張するかのような愚かさであり、その愚かさを本能的に包み隠すために、自分たちで基準を定め、表彰制度を作り、人を神のように崇め奉り、崇め奉られることに憧れを抱き、時には、神によって造られた被造物である動物までも、あたかも何かを超越した存在であるかのように崇め奉ってしまう始末だと言います。

世の中、沢山の表彰制度がありますが、結局のところ、そのすべては、誰かが、誰かの基準で、誰かに優劣を付けるため、そして、その優劣において優が付けられることを目標に人生生きれば幸せなはずだという思い込みの中で、幸いを求めていくようにしむけられている。

それをもって慰めている。

「まあ大丈夫だ」と思わせている。

「そんなもんだよ」と印象付けている。

または、「すごい！」と、井の中の蛙同土褒め合っている、

そんな流れを作り出し、神を知るというまことの知性から引き離そうとする空中の権威を持つ支配者という今も働いている悪霊に従って、まんまと神から引き離されている。

そして、そのような人の状態を、「暗くなった」と表現しています。

ただでさえ鈍くなってしまっている心が、さらには、暗くまでなっていると言います。

エペソ書 4 : 18 でも「知性において暗くなり」と言っていますように、知性とは、闇から光へと導きだされることであり、光に導き出された結果、何が光で何が闇なのかを見分けることが出来るようになり、見えなかったものが見えるようになることです。

では、何が光で、何が闇なのでしょう？

ヨハネの福音書 8 : 12 (パワポ)

イエス・キリストが光です。

イエス・キリストを知らないならば、どんなことをしても、闇の中を手探りで、見えているふりをして歩んでいることになってしまいます。本当は見えていないのに。

本当は見えていないのに、見えているふりをして歩んでいることほど、愚かなことはないでしょうし、不確かなものもないでしょうし、不安なものもないでしょう。

だから、その不安さゆえに、その不安さを払拭したいという思いが、執着を生みます。

何に、執着するのか？

目に見えるものにです。

手でさわれるものにです。

いつかは忘れ去られてしまうものの、一定期間だけでも記憶として留めておけるものにです。

イエス様がかつて、そういう執着、愚かな生き方をしている人の姿を実話のような例え話をして、まことの知性とは逆の、「知性だ」と勝手に主張している愚かさについて教えて下さったことがあります。

ルカの福音書 12 章です。

ルカの福音書 12 : 15 - 21 (パワポ)

この愚かな金持ちは無知でした。

何において無知だったかと言いますと、「人のいのちは財産にあるのではない。神に対して富まない者は愚かだ、蓄えのないことと同じだ」ということにおいて無知でした。

βίος ビオスのいのちが真の命ではなく、ζωή ゼエのいのちが真のいのちであることを知らないという、正に致命的な知識について知らなかったという無知です。

土のちに帰って終わる **bios** ビオスのいのちのためには蓄え、準備し、守り、延命しようとしたが、いつなん時どんな形で突然跡形もなく消え去ってしまうということには目が行かなかったのか、知ろうとしなかったのか、語られ、情報としては知ってはいたけれども、それを受け入れようとも、知ろうともせずに、目に見える **bios** ビオスの肉体に執着し、しがみついて、結局、**bios** ビオスも失い、**ζωή** ゴエのいのちも失ってしまいました。

これが、無知を生きるということです。

私たちのこの目に見える **bios** ビオスの人生は、目には見えない確かな神のいのち **ζωή** ゴエを準備するためのものであり、**ζωή** ゴエのいのちに対する準備のない **bios** ビオスのいのちは、ちに帰って終わりです。

創世記2章で神様が人に向かって、「あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついにはその大地に帰る。あなたは神の息を失ってしまった土のちりでしかなくなってしまったから、土に帰るのだ」と言われた通りのことをその身に帯びて、終わってしまうわけです。

そのことを知って、まことの神に、イエス・キリストに立ち返ることが知性であり、その知性が私たちを以てして、永遠のいのちを獲得するその日まで導いて行きます。

このことを知ろうとしなかった、受け入れようとしなかった、生きようとしなかったのが、この愚かな金持ちの生き方であり、この人間世界の世界観なのだと思います。

Conclusion

では、私たちはどのように生きますか？

そういう世界観の中で生きるものとして、どう生きますか？

どのいのちを生きますか？

愚かな **bios** ビオスのいのちを生きますか？

知性である **ζωή** ゴエのいのちを生きますか？

そりゃ、**ζωή** ゴエのいのちを生きることが、まことのいのちを生きることで、そのいのちを生きたいと生きようと思いますよね？

では具体的に、**ζωή** ゴエを生きるとは、どういう生き方でしょうか？

単純です。

祈り、賛美し、神の御言葉をどんな宝よりも楽しみ渴望し、礼拝とともに生きること。

「単純だけれども簡単なことではない」ということは、私たちもう承知の事実です。

でも、それを諦めずに生きるのです。

そこから与えられえる力によって生きるのです。

そこから与えられる喜びによって生きるのです。
そこ与えられる霊的視野、霊的洞察力、知性、励ましや導きによって生きるのです。

そりゃ誰だって失敗します。
でも、その失敗までも、神さまは疾うの昔から計算済みです。
なので、堂々と、図々しい程に、神の御前に出て行きながら ζωή ゴエのいのちを生きましょう。
生かされて行きましょう。

最後にヘブル書の御言葉を読んで終えたいと思います。

ヘブル人への手紙 4 : 14 - 16 (パウロ)

お祈りいたします。

祝祷 : エペソ 4 : 18